

肥後の古瓦 —技法と系譜—

村 田 多津江^{*}・甲 元 眞 之^{**}

熊本県、すなわち旧肥後国には、縄文時代から古墳時代までの遺跡が数多く存在し、それらの遺跡に関する考古学的研究が積み重ねられてきた。しかし 古墳時代以降、すなわち歴史考古学といわれる分野においては、かなりの資料が存在するにもかかわらず、いま一歩立ち遅れた観がある。

熊本県内の古瓦について、最初に考古学的考察を加えられたのは、下林繁夫氏であった。下林氏は、大正15年、『熊本県下における古代礎石と古瓦』と題する報文を発表、国分寺・古府中・浄水寺跡・陳内・明言院・悟真寺・十蓮寺・立願寺・渡鹿・正院厳島神社・瀬戸坂・豊国社跡・熊本城の古瓦の紹介を行った文献がいくつか発表されたが、いずれも表採資料によるものであった。

しかし、戦後になってから、遺跡の発掘調査が本格的にすすめられ、古瓦資料は飛躍的に増加した。

昭和29年の立願寺廃寺、昭和32年～33年の陳内廃寺、昭和34年～35年の渡鹿廃寺、昭和35年の興善寺、昭和41年の肥後国分尼寺、昭和46年の肥後国分寺など、発掘調査が続々と実施された。殊に、調査活動の中心にあった松本雅明氏は、その調査報告を次々に発表され、肥後の古瓦及び古代遺跡の研究の基礎を築かれるとともに、従来、表採資料の紹介にとどまっていた古瓦研究を大きく進展されたのであった。

現在、肥後国内における古瓦出土地は、125ヶ所に及んでいる。

125ヶ所の内訳は、寺院跡26ヶ所、官衙跡11ヶ所、窯跡15ヶ所、散布地69ヶ所となっている。このうち、軒先瓦を出土する遺跡に限ってみても、その数は30ヶ所を越え、その大半は寺院跡である。

寺院跡を中心に出土する古瓦を概観・分類するにあたって、製作技法の説明から始めることにする。

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・鷗尾・榎先瓦・隅木先瓦・熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦・螭羽瓦・鳥衾などがあり、磚もこれに準ずる。この中で、量的に多く技法的な分析がなされているのは、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の4種である。

平瓦には、桶巻き作りと一枚作りがある。桶巻き作りは、桶様の模骨に布をはり、その上に粘土をまわして叩きしめたものであり、粘土ひと巻きによりできる枚数によって、2～4枚作りに分けられる。一枚作りは、平瓦一枚の大きさの凹型、もしくは凸型の台の上に布を敷き、粘土をつめて叩きしめるものである。

* 熊本大学文学部大学院

** 熊本大学文学部助教授

桶巻き作りでは、①平瓦の側面部に内面（布目のある方）から切断のための切込みがある。②粘土板の重ね目がある。③粘土紐を巻き上げた痕跡がある。④布の継ぎ目がある。のいずれかで判断でき、一枚作りは、側面に布目が及ぶことで判明する。

桶巻き作りは、飛鳥時代からみられ、全国にその技法が及んだ。一枚作りは、白鳳の頃畿内に出現したが、周辺には及んでいない。熊本では、すべて桶巻き作りで製作されている。

桶巻き作りには、一枚の粘土板を番線で切りだしたもの（糸切り痕をとどめることで知られる）と、粘土紐を巻き上げて作るものとがあり、陳内廃寺では両者が共存し、国分尼寺では後者が多い。

丸瓦には、行基葺丸瓦・行基葺方形丸瓦・玉縁付丸瓦の3種がある。行基葺方形丸瓦は南滋賀廃寺など白鳳期の一部の寺院にみられるにすぎない。

丸瓦の作り方は、平瓦と同種で、2～4 cm幅の板（模骨）を桶状につないで布を巻き、粘土をまわして叩きしめたもので、内面に切断のための切込みを入れて2分割して作る。

丸瓦にも、一枚の粘土板をめぐらすものと、粘土紐を巻き上げるものの2種類があり、国分尼寺の丸瓦は後者でつくられる。

なお、豊前地方では、模骨は板ではなく竹で桶状のものを作り、丸瓦の製作にあたったことが知られるものが多い。

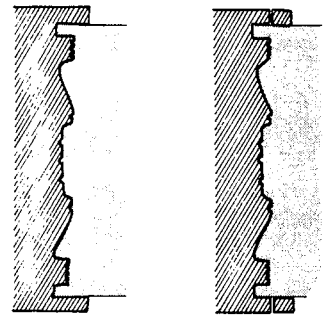
平瓦・丸瓦ともに凸面は叩き板でしめられるが、この叩き板の文様により、縄叩き・格子叩きがあり、さらに叩きのあとヘラナデを施して無文になったものもある。なお、九州では、この叩きの文様に青海波文などがみられることがあり、須恵器工人の製作になるものと認められ、7世紀後半を上限とする須恵器工人の瓦作りへの参加の証跡は、平安時代の末期まで各地に認められるところである。

軒先瓦の製作技法、とりわけ瓦当文様の成形については近藤喬一氏の研究があり、今それを要約してゆこう。これは、瓦当文様を表出するための木範の被せ方により分類したものであり、軒丸瓦に例をとると次のようになる。

A型 木範が瓦当面の外縁外周まで及ぶもの。従って、外周に範痕が残される。これは、木範が一枚の場合と、文様の彫りが深い時には二枚の場合とがある。二枚重ねの範の場合には、外縁外周に⊥状の範痕が残ることで確かめられる。

B型 木範が瓦当面の外縁外端までのもので、外端に一部範痕が残る。

C型 木範が瓦当文様の内区までしかなく、範痕は内区外端、多くの場合、外縁の内側で認められる。こ



A 型

の結果、外縁は不整円形となり、次に述べる一本造りの方法と組み合わせる時には、瓦当文様まで切断される場合もある。

こうした近藤氏の分類と、次に述べる瓦当面と筒の接合方法によって、大まかな技法の分類が可能となる。

I 型 外枠被せB型の木範を使い、まず文様面の凹凸がなくなるほど粘土を入れて文様を出し、さらに瓦当の厚さを増すための粘土を加える。次に、円筒形の筒を、木範の外側から、瓦当文様の一番突出した部分と同じか、あるいはそれよりもやや深く置き、瓦当と筒が接合しやすいように外側から叩きを加える。最後に、丸瓦と同様な形に筒を縦半分切断する。

II 型 外枠被せB型の木範を使い、瓦当の厚さほどの粘土を範につめて瓦当を形成し、丸瓦を瓦当外縁にそって接合した後、内外面に支持土をめぐらす。

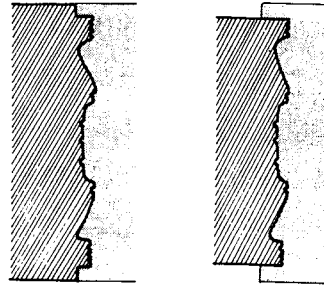
III 型 外枠被せA and B型の範に、まず瓦当文様を表出するだけの薄い粘土を入れ、次に丸瓦を瓦当裏面に置き、さらに瓦当面の厚さになるように裏面に粘土をつぎたし、筒の内外面に支持土を加える。

IV 型 外枠被せA and B型の範に瓦当面の厚さほどの粘土をつめて瓦当を形成し、裏面の瓦当外周より、やや内側に半円形の溝をほって、そこに丸瓦をさし込むもの。最後に筒内外に支持土を加え補強する。

V 型 これは、いわゆる一本造りと称されるもので、細かくは2種に分類しうる。

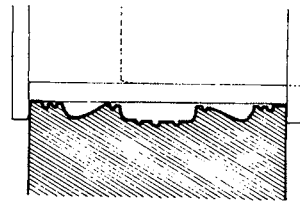
V-1 型 瓦当面の厚さが薄い瓦当をつくる。模骨に粘土を巻き、さらに頂部にも粘土を加えて叩きしめ、次に頂部に瓦当面をはり合わせる。最後に丸瓦の筒になるように余分の筒を切断する。

V-2 型 模骨の周囲と頂部に粘土をまき、C型の木範を上から押えつけて瓦当文様をつくり、

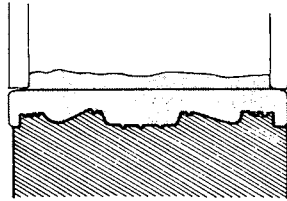


B 型

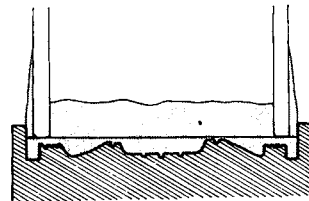
C 型



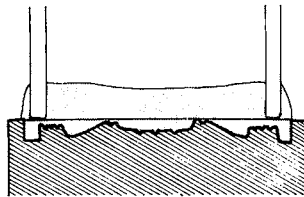
I 型



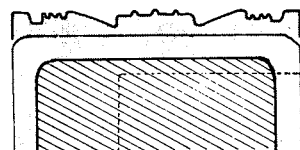
II 型



III 型



IV 型



V-1 型

筒の余分な所を切断するもの。

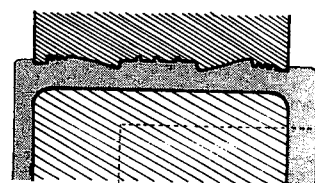
軒平瓦の瓦当面の製作技法は、軒丸瓦に準ずる。但しA型は少く、ほとんどはB型である。瓦当と平瓦の接合のやり方では、次の4種がある。

I 型 一枚の平瓦の下部に顎となる粘土帯を付加して瓦当部をつくり、これを範に入れて軒平瓦を形成する。この場合、付加した顎部と本体の平瓦の接合をよくするために、顎に叩き痕が認められる。なお、この変形として一枚の平瓦の上・下に粘土帯加えるものもある。

II 型 木範に瓦当の厚さほどの粘土をつめて瓦当部をつくり、平瓦を接合して、上・下面から支持土を加え、軒平瓦をつくる。

III 型 木範に瓦当の厚さほどの粘土をつめ、その裏面に溝をほって、先端を加工した平瓦をさし込み、上・下に支持土を加える。

IV 型 一枚の平瓦の先端部を木範に押し込んで瓦当面をつくり、そのまま平瓦を折り曲げて軒平瓦をつくる。これは特殊なやり方で、平安時代中期末に京都近隣で使われた手法で、さほどの広がりはない。



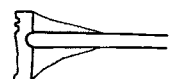
V-2 型



I 型



II 型



III 型



IV 型

九州地方でみられる軒丸瓦は、上述したI・II・III・IV型の接合方法でつくられるもののみである。そのうちII型については、今のところよく分らない。I・III型は木範の彫りが深いものの、いいかえれば、外縁が高く、内区文様が隆起したり、外縁内側に鋸歯文などの文様を配するタイプに多い。陳内廂寺では、このI・III・IV型のいずれもが、軒平瓦とセットの型で出土している。単弁8葉の蓮華文軒丸瓦はI型、老司タイプの複弁8葉蓮華文軒丸瓦はIII型、鴻臚館タイプの複弁8葉蓮華文軒丸瓦はIV型である。すなわち、陳内廂寺にみられる瓦の製作技法が、熊本における瓦の製作技法のすべてとあってよい。熊本における軒丸瓦の下部の裏面に外縁と同様に凸状の突出がみられる。すなわち、I型では筒の切断が瓦当よりも高い所で行われた時におこるものであり、III型では、外縁内側の鋸歯文を表出するために、範の外縁部にまず粘土紐をあて、次に内区等の文様帯に粘土をつめ、筒を置いた後に内部に粘土を枠よりも低くつめたためにおこるものである。このことからIII型の場合、木範が二枚重ねて使われた可能性もあるが、その証跡は、今指摘することはできない。

I型の接合法でつくられた瓦は、陳内廃寺の他に、浄水寺・岡遺跡・池辺寺・興善寺・託麻郡家跡にみることができ、Ⅲ型は十蓮寺・浄水寺・国分寺・国分尼寺・田島廃寺・中村廃寺・菊池郡家跡・立願寺廃寺・稻佐廃寺・平原窯跡・興善寺・渡鹿廃寺などで出土している。Ⅳ型は鴻臚館タイプの瓦がそれにあたり、陳内廃寺・浄水寺・国分寺・国分尼寺・古保山廃寺・稻佐廃寺・興善寺などでの出土をみる。

軒平瓦は熊本の場合、ほとんどが、重弧文軒平瓦にその典型をみるように、一枚の平瓦の下部に顎として粘土帯を付加してつくるものであり、この伝統が永く引き継がれてゆく。

畿内での瓦の技法は変遷をみてゆくと、Ⅰ→Ⅲ→Ⅳ型の変化をたどりうるが、熊本では最も古いと思われる陳内廃寺に3種が共存し、浄水寺や興善寺にも出土していることなどからすれば、技法がほとんど時代差なく存することとなる。従って、これらの技法が一番古くからみられる陳内廃寺での、平・丸瓦との組合せの分析によって、共存が真なのか、時代差が真なのか把握しうるのではないか。

以上の製作技法上の特徴を中心に各遺跡出土の古瓦の系統をたどってみることにする。

今、寺院跡を中心に出土する軒先瓦について概観すると、大きく3つの系統をたどることができるようである。すなわち、

- (1) 陳内廃寺系古瓦
- (2) 立願寺廃寺系古瓦
- (3) 肥後国分寺系古瓦

の3系である(文末瓦当拓本参照)。

陳内廃寺系古瓦に含まれるものは、陳内廃寺出土の老司式複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット(1・2)・鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット(3・4)・単弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット(7・8)の3種の古瓦と、それぞれを祖形として派生したと考えられる次の古瓦である。

○平原瓦窯跡出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット(18・9)

○託麻郡家跡出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦(9～11)

○渡鹿廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット2種類(12・13、14・15)及び複弁6葉蓮華文軒丸瓦と鋸齒文軒平瓦のセット(16・17)

○興善寺廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒丸瓦のセット(20・21)及び、単弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット(22・23)

○浄水寺跡出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行庫草文軒平瓦のセット(24・25)

以上が含まれる。

このうち、特に注目されるのは、渡鹿廃寺出土複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセットのである。軒丸瓦は、いわゆる鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦の外縁に鋸齒文を施した

形をとるが、これは陳内廃寺における老司式複弁8葉蓮華文軒丸瓦と鴻臚館式複弁8葉蓮華文軒丸瓦が、お互いに影響した結果と考えられる。また、軒丸瓦にみられる唐草の向きの逆転は、祖形となった陳内廃寺の均整唐草文軒平瓦が、すでに逆転現象を示していることを考えると、文様の伝わり方を考える上で興味深い。

興善寺廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦は中房の蓮子数が著しく多くなり、蓮弁端が離れ一見単弁風であるが複弁を意図したものと考えられ、また外縁に線鋸齒文を施してあることから、陳内廃寺出土の老司式古瓦からの派生とみなした。軒平瓦についても、均整であるにもかかわらず、そのモチーフは老司系の扁行唐草文の片側半分を折り返したものと考えられるので、これも陳内廃寺系とした。

立願寺廃寺系古瓦には、立願寺廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒丸瓦のセット5種類（26・27・28・29、30・31、32・33、34・35）と単弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット（36・37）及び、それらから変化したと思われる稲佐廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦（38）、複弁8葉蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦のセット（40・41）、高橋町出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦（48）が含まれる。

肥後国分寺系古瓦には、肥後国分寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット（50・51）、複弁4葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセット（57・58と同形）、肥後国分尼寺出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦（73と同形）及びその変形態を含む。

肥後国分寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦の変形態としては、託麻郡家跡出土の複弁8葉蓮華文（63）、古保山廃寺出土の複弁8葉蓮華文軒丸瓦（61）、十蓮寺出土複弁8葉蓮華文軒丸瓦2種類（64・66）、菊池郡家出土の複弁蓮華文軒丸瓦（69・70）等が含まれる。

複弁4葉蓮華文軒丸瓦の変形態と考えられるものには、肥後国分寺出土の単弁蓮華文軒丸瓦4種（53～56）、田島廃寺出土単弁蓮華文軒丸瓦（71）、池辺寺出土単弁17葉蓮華文軒丸瓦（78）等が含まれる。

肥後国分尼寺出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦の系統には、池辺寺出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦（73）、岡遺跡出土の単弁8葉蓮華文軒丸瓦（75）、浄水寺跡出土の単弁蓮華文軒丸瓦（77）等が含まれる。

以上のように、肥後の古瓦は、陳内廃寺、立願寺廃寺、肥後国分寺、国分尼寺の創建を契機として、展開されていったのであるが、それは、およそ、どれくらいの時期にあてられるだろうか。

まず、陳内廃寺は、老司式・鴻臚館式・単弁形式の3種類のセットを持つ。

老司式は、藤原宮式を祖形とすることと、大宰府の整備の過程で成立したことを考えるとその時期は、およそ8世紀初頭と考えられる。

鴻臚館式は、興福寺の瓦に似ているが、それより先行するといわれ、やはり8世紀のごく早

い時期のものであろう。

陳内麿寺においては、どちらもあまり変化しない形で受容されている点、陳内麿寺が法起寺式（特に、金堂が東に開く観世音寺式）の伽藍配置をとる点など、観世音寺の影響を強く受けていることは、うたがいない。

観世音寺の性格を考えれば、陳内麿寺は、その創建年代をさかのぼることはないと思われる。

おそらくは、観世音寺、大宰府政府の造営が、ほぼ完成した時期に、肥後へ、大宰府からの工人集団の移動があったものと思われる。

従って、陳内麿寺の創建は、早くとも8世紀前半と思われる。

なお、単弁8葉蓮華文軒丸瓦及び重弧文軒平瓦については、不明な点が多いが、松本雅明氏のいうように、補修瓦と考えられるが、老司式と鴻臚館式は、その伝播の状況から考えて、あまり時期を異にせずに使用されたと思われることから、単弁軒丸瓦の時期は、さらに下るものと思われる。

肥後国分寺に関しては、『続日本紀』に次の記載がある。天平勝宝8年（756）12月「己亥・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向等26国、国別に灌頂幡一具、道場幡49首、緋綱2条を領ち下す。以って周忌の御斎莊饗に充て、用ひ了れば金光明寺に収め置き、永く寺物と為し、事に随ひて出し用ひよ。」

これによると、756年までには、国分寺の主要堂宇は完成していたものと思われる。

立願寺麿寺の創建に関しては、指標となるものに欠けるが、肥後国分寺・国分尼寺にみられる、複弁4葉蓮華文軒丸瓦の蓮弁と外区にめぐらした唐草の手法が、おそらく立願寺麿寺の軒丸瓦の影響を受けたものと思えることから、国分寺の創建時には、すでに完成していたのではないだろうか。

浄水寺跡に関しては、境内に残されている石碑の碑文により、その創建年代は、790年であることがわかっている。

奈良時代前半の陳内麿寺の建立にはじまった肥後の寺院造営は、ほぼ時を同じくして、立願寺麿寺、国分寺・国分尼寺の完成をみたものと思われる。

陳内麿寺は、その出土瓦の種類が限られていることから、存続期間は、あまり長くはなかったであろう。

それに対して、国分寺からは、軒丸瓦9種軒平瓦9種が、現在まで知られている。

この軒瓦の種類の高さは、存続期間が長期に及んだことを示すとともに、国分寺の創建・修復に際して、肥後国内各地からの瓦の供給があったことを示すものではないだろうか。

先に述べた、3つの古瓦の系統のうち、最も広範に展開しているのは、国分寺系の古瓦であった。

井上薫氏は、『奈良朝仏教史の研究』の中で、国分寺の造営を三期に区分し、第1期を天平9年～20年、第2期を天平勝宝元年～天平宝字7年、第3期を天平宝字8年～延暦3年としている。井上氏によれば、第一期は、封戸・正税・寺田・寺地などを施入し、国司と国師を督励するとともに、催検使を派遣し郡司に造営を主当させるように命じた時期であり、第2期は、郡司ら地方豪族による協力があらわれ、造営がかなり進歩した国もある時期、第3期は、ほぼ国分寺の完成した時期とされている。

肥後国分寺の創建は、第2期にあたり、その造営に対する郡司らの地方豪族の協力のあらわれ、瓦の供給にあったのではないだろうか。

従って、国分寺の造営が、一段落した時点で、逆に、郡司層による寺院造営が活発になった結果が、古保山廃寺、託麻郡家跡、十蓮寺、菊池郡家跡にみられる、国分寺系古瓦の分布にあらわれているのであろう。

こうして、奈良時代中期から後期にかけて、最も活発となった、肥後の寺院造営は、浄水寺の建立によって、ひとつの区切りを与えられた形になる。

浄水寺は、肥後において、ただ1例、私寺であることが、はっきりしている寺院である。しかも、この寺は、その碑文から明らかなように、826年には、400町に近い私有地（荘園）を有していた。それは、墾田をさかんに行った結果であるが、それだけの権威と財力をこの寺院が持っていた、その経済的な裏づけはなんであったか。それは、八の瀬戸・西山・陳ノ平といった栗林山に広がる窯跡群と、当尾・川床・びわだ・曲野といった松橋方面に広がる窯跡群とを掌握していたからであろう。

この一大窯業地帯は、古墳時代後半から、奈良・平安時代、さらには中世にまで至る、肥後の窯業の中心となった地域である。

この経済力を背景として、荘園を殖していった浄水寺は、828年、定額寺院としての地位を得るまでに至ったのである。

参考文献

- 原田敏明編 『熊本県の歴史』 文画堂 1959 東京
井上 薫 『奈良朝仏教史の研究』 吉川弘文館 1966 東京
九州歴史資料館編 「九州の古瓦と寺院」 九州歴史資料館 1974 福岡
松本雅明編 『城南町史』 城南町史編纂会 1965 熊本
松本雅明編 『九州の古瓦―飛鳥から江戸初期まで―』 熊本日日新聞社 1965 熊本
小田富士雄 「九州に於ける大宰府系古瓦の展開(1)～(4)」 九州考古学 1・2・5・6・13号 九州考古学会 1957～1961 福岡
熊本市文化財調査委員会編 『熊本市西山地区埋蔵文化財調査報告書』・『熊本市東部地区埋蔵文化財調査報告書』・『熊本市南部地区埋蔵文化財調査報告書』 熊本市教育委員会 1969・1973・1975 熊本

松本雅明 「興善寺廃寺調査報告」 熊本県文化財調査報告第一集 熊本県教育委員会 1961 熊本
松本雅明 『田島廃寺調査報告』泗水町教育委員会 1972 熊本
下林繁夫 「熊本県下における古代礎石と古瓦」 熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第3冊 熊本
県 1926 熊本
平安博物館『平安京古瓦図録』雄山閣 1977 東京

軒丸瓦一覧表

()内は推定

	内 区	中 房	外区内縁	外区外縁	出土地	同 形 瓦
1	複弁8葉蓮華文	1+5+10	珠 文	鋸齒文	陳内麿寺	
3	〃	1+4+8	〃	素 緑	〃	
5	〃	—	〃	鋸齒文	〃	
6	単弁8葉蓮華文	—			〃	
7	〃	4		重圈文	〃	
9	〃	〃		—	託麻郡家	
10	〃	〃		—	〃	
11	〃	〃		重圈文	〃	
12	複弁8葉蓮華文	1+4+8	珠 文	鋸齒文	渡鹿麿寺	
14	〃	〃	〃	〃	〃	
16	複弁6葉蓮華文	(1+6)	〃	〃	〃	
18	複弁8葉蓮華文	1+5+9	〃	〃	平原窯跡	
20	〃	(37)	〃	〃	興善寺麿寺	
22	単弁8葉蓮華文	4		重圈文	〃	
24	複弁8葉蓮華文	1+8+8	—	—	浄水寺跡	
26	〃	21		鋸齒文	立願寺麿寺	
28	〃	1+5+10	珠 文	—	〃	
30	〃	1+6	唐草文	鋸齒文	〃	
32	〃	—	〃	—	〃	
34	〃	—	〃	鋸齒文	〃	
36	単弁8葉蓮華文	—		—	〃	
38	複弁8葉蓮華文	(1+5+9)		素 緑	稻佐麿寺	
40	〃	—	唐草文	〃	〃	
42	唐 草 文	—		—	〃	
43	〃	—		素 緑	〃	
44	単 弁 蓮 華 文			〃	〃	
46	〃	1+4		〃	中村麿寺	
48	複弁8葉蓮華文	(1+8)	唐草文	〃	高橋町	
49	鬼 面 文		〃	〃	立願寺麿寺	
50	複弁8葉蓮華文	1+4+8	珠 文	〃	肥後国分寺	肥後国分尼寺
52	〃	—	〃	〃	〃	
53	単弁8葉蓮華文	(1+6)		〃	〃	
54	〃	—	唐草文	〃	〃	
55	〃	—	〃	〃	〃	
56	単弁10葉蓮華文	1+4		重圈文	〃	池辺寺付近
57	複弁4葉蓮華文	1+5	唐草文	素 緑	宮園遺跡	肥後国分寺・ 国分尼寺
61	複弁8葉蓮華文	1+8	珠 文	〃	古保山麿寺	
63	〃	(1+8)	〃	〃	託麻郡家	
64	〃	1+7+7	〃	〃	十蓮寺	
66	〃	1+6+9	〃	〃	〃	
69	(〃)	—	〃		菊池郡家	
70	(〃)	(1+7)	—	—	〃	
71	単弁8葉蓮華文	1+4		重圈文	田島麿寺	
73	単弁8葉蓮華文	1+6	唐草文	素 緑	池辺寺跡	肥後国分尼寺
75	〃	1+6		〃	岡 遺 跡	
77	(〃)	—		〃	浄水寺跡	
78	単弁17葉蓮華文	1+7		〃	池 辺 寺 跡	肥後国分尼寺

(註) 番号はP192~199の古瓦拓影の番号と対応する。

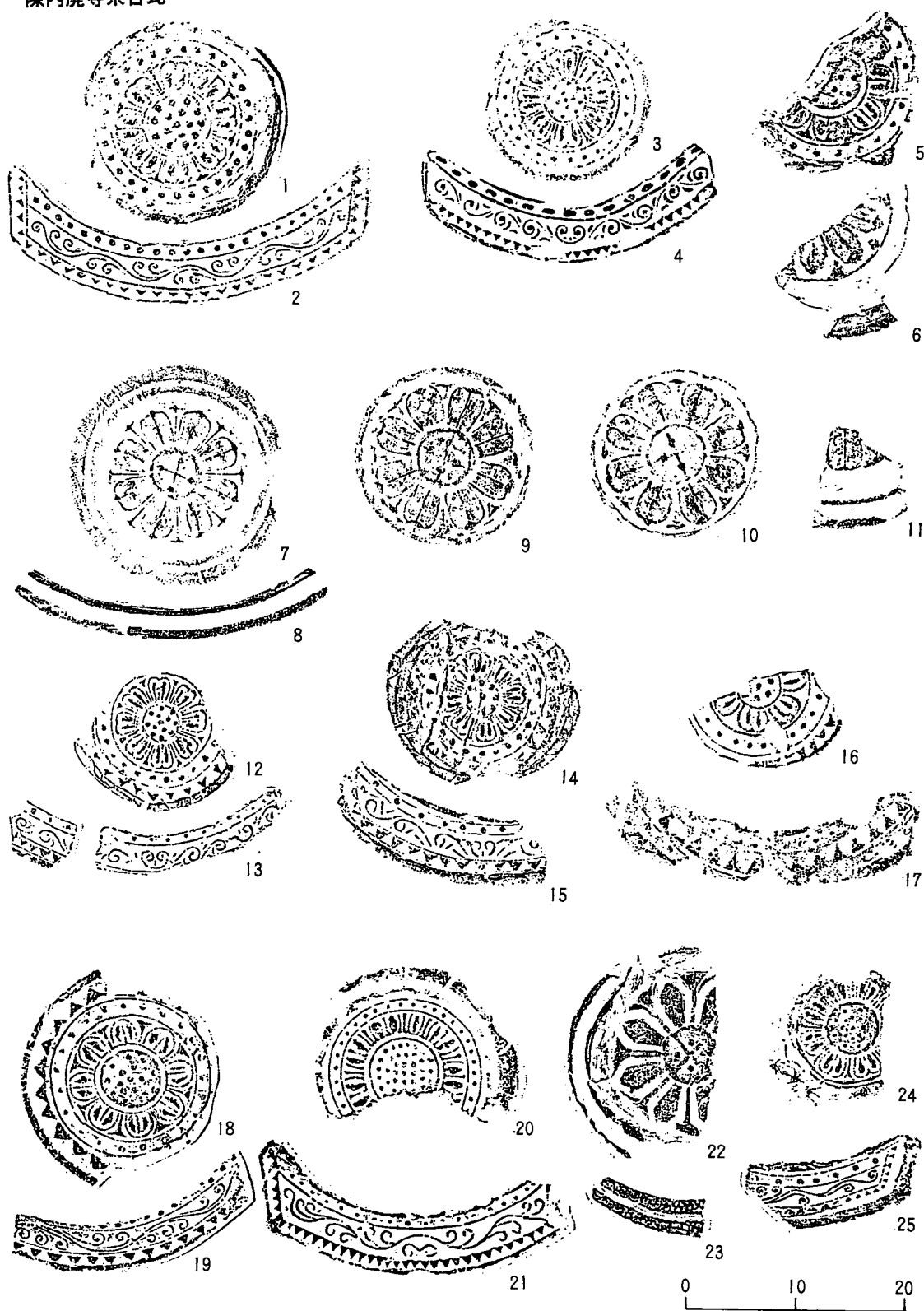
軒平瓦一覧表

()内は推定

	内 区	上外区	下外区	脇 区	断面形	出 土 地	同 形 瓦	軒瓦との 組合せ
2	扁 行 唐 草 文	珠 文	鋸歯文	鋸歯文	段 顎	陳 内 麿 寺		1
4	均 整 唐 草 文	〃	〃		〃	〃		3
8	重 弧 文				〃	〃		7
13	均 整 唐 草 文	珠 文	鋸歯文	鋸歯文	段顎・無顎	渡 鹿 麿 寺		12
15	〃	〃	〃	〃	バチ形顎	〃		14
17	鋸 歯 文	〃	珠 文	—	段 顎	〃		16
19	扁 行 唐 草 文	〃	鋸歯文	—	〃	平 原 窯 跡		18
21	均 整 唐 草 文	〃	〃	鋸歯文	〃	興 善 寺 麿 寺		20
23	重 弧 文				〃	〃		22
25	扁 行 唐 草 文	珠 文	鋸歯文	鋸歯文	〃	浄 水 寺 跡		24
27	〃	鋸歯文	—	—	〃	立 願 寺 麿 寺		26
29	〃	珠 文	鋸歯文	鋸歯文	無 顎	〃		28
31	〃	〃	〃	〃	段 顎	〃		30
33	〃	—	〃	〃	—	〃		32
35	〃	素 緑	素 緑	素 緑	—	〃		34
37	重 弧 文				(無顎)	〃		36
39	扁 行 唐 草 文	素 緑	素 緑	素 緑	段 顎	稻 佐 麿 寺		
41	〃	珠 文	〃	—	〃	〃		40
45					—	〃		44
47					段 顎	中 村 麿 寺		46
51	(均 整 唐 草 文)	珠 文	珠 文		〃	肥 後 国 分 寺	肥 後 国 分 寺	50
58	均 整 唐 草 文	〃	〃	珠 文	〃	肥 後 国 分 寺		
59	〃	〃	〃	—	—	〃		
60	〃	〃	〃	珠 文	段 顎	託 麻 国 府 跡		
62	(〃)	〃	—	—	—	古 保 山 麿 寺		61
65	扁 行 唐 草 文	〃	鋸歯文	—	段 顎	十 蓮 寺		64
67	〃				〃	〃		
68	〃				〃	〃		
72	〃	素 緑	素 緑	素 緑	〃	田 島 麿 寺		71
74	唐 草 文	鋸歯文	鋸歯文	—	—	池 辺 寺 跡		73
76	〃	素 緑	素 緑	素 緑	段 顎	岡 遺 跡		75

(註) 番号はP192～199の古瓦拓影の番号と対応する。

陳内廐寺系古瓦



1 ~ 8 陳内廐寺出土

20 ~ 23 興善寺廐寺出土

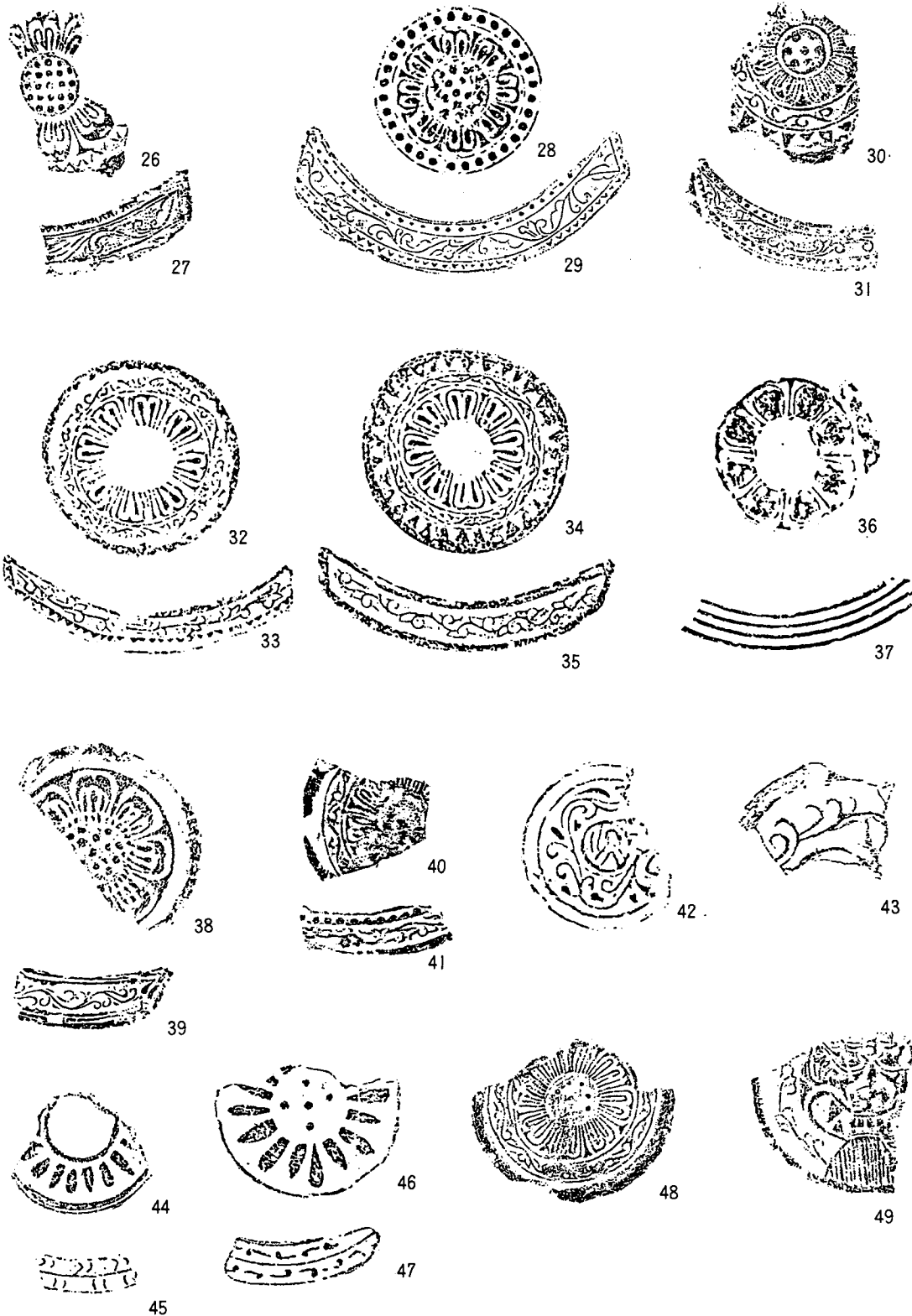
9 ~ 11 託麻郡家跡出土

24 · 25 淨水寺跡出土

12 ~ 17 渡鹿廐寺出土

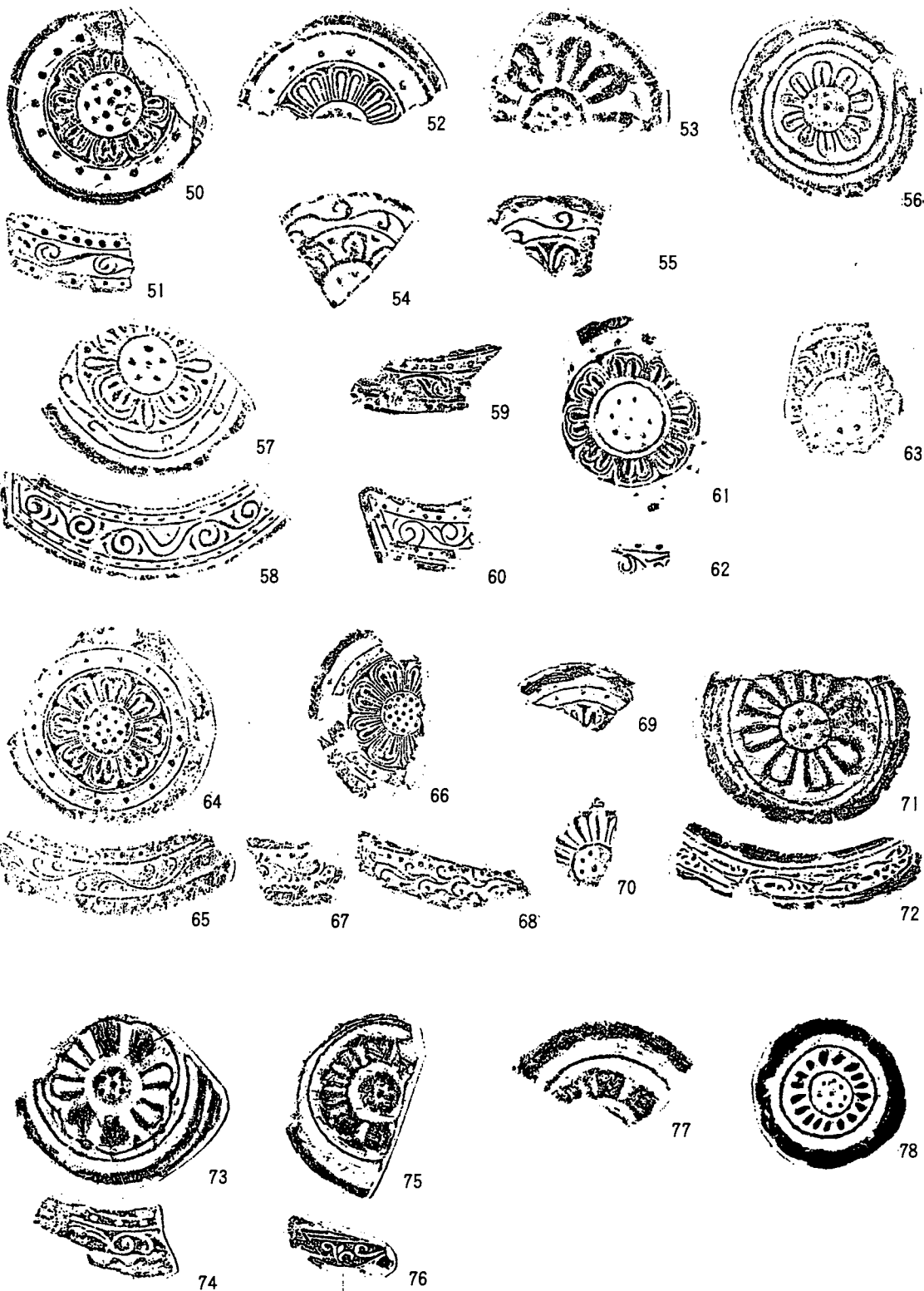
18 · 19 平原窯跡出土

立願寺麿寺系古瓦



26~37・49 立願寺麿寺 38~45 稻佐麿寺 46・47 中村麿寺 48 熊本市高橋町

肥後国分寺系古瓦

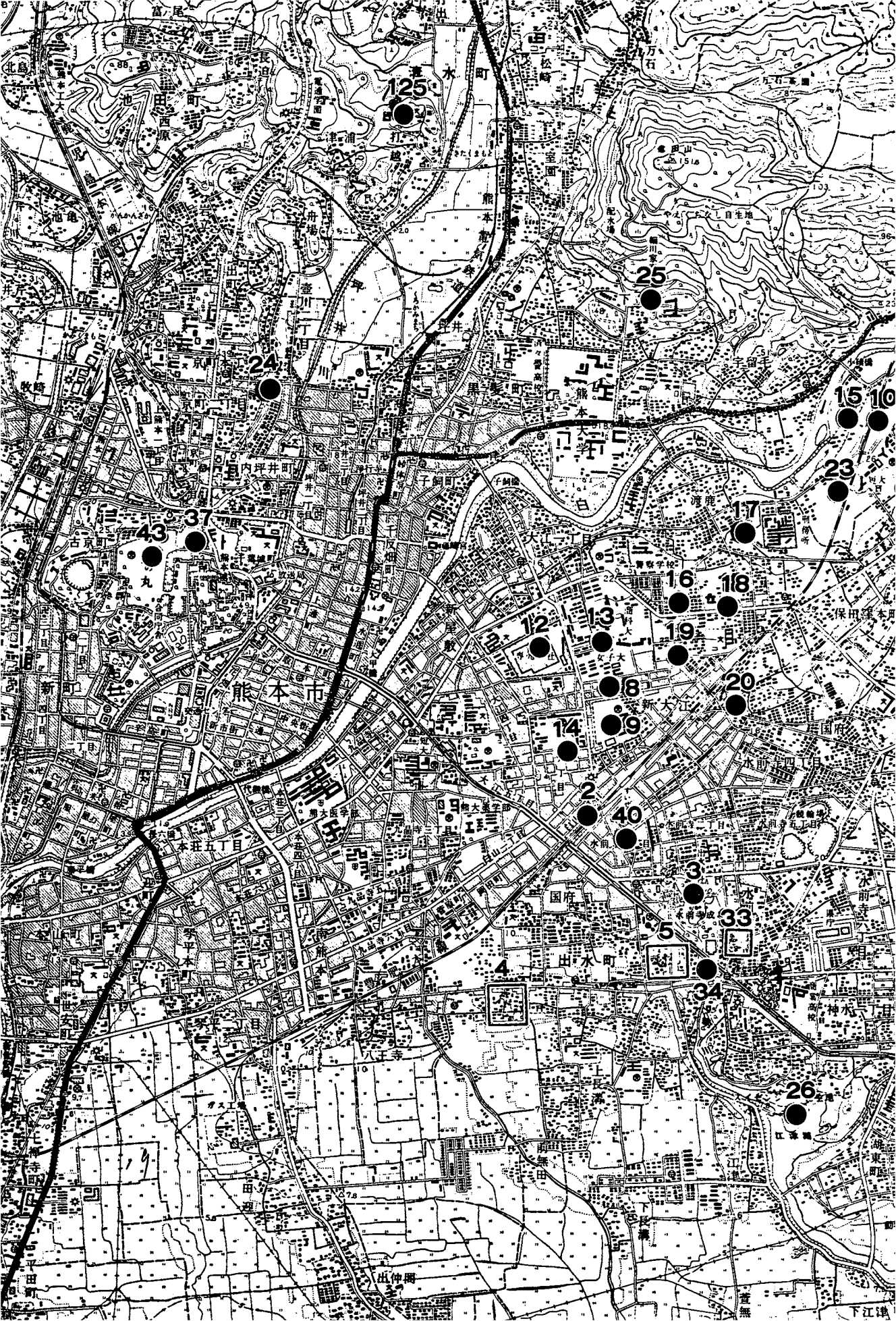


50~56 肥後国分寺 57 宮園遺跡 58・59 肥後国分尼寺 60 託麻国府跡 61・62 古保山廃寺
 63 託麻郡家跡 64~68 十蓮寺 69・70 菊池郡家跡 71・72 田島廃寺 73・74・78 池辺寺
 75・76 岡遺跡 77 浄水寺跡









熊本県内古瓦出土地名表

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	管	備考
1 池辺寺跡	熊本市池の上町平字柿の木ビラ	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・鬼瓦	松本雅明・済々養高校 熊本博物館	熊本史学11号	西山P 55
2 熊中通遺跡	熊本市出水町国府字代継	散布地	布目瓦	熊本博物館	肥後上代文化史	東部P 160
3 水前寺廃寺	熊本市出水町今	寺院址	軒平瓦・布目瓦		東部P 221	熊本史学12号
4 肥後(託麻)国府	熊本市出水町国府本村	国府址	軒平瓦・布目瓦・鬼瓦片	熊本大学・松本雅明	南部P 53	
5 肥後国分寺跡	熊本市出水町今	寺院址	軒丸瓦・軒平瓦	熊本大学・熊本博物館	南部P 71	
6 北上・北上B遺跡	熊本市石原町平252～257	散布地	布目瓦片		東部P 17	
7 古屋敷遺跡	熊本市画津町字古屋敷	散布地	布目瓦	東光彦・熊本博物館	東部P 211	
8 大江新町遺跡	熊本市新大江1丁目	散布地	布目瓦片		東部P 131	
9 熊高敷地遺跡	熊本市新大江1丁目	散布地	軒丸瓦・軒平瓦		東部P 159	
10 新南部A遺跡	熊本市新南部町	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P 25	
11 新南部B遺跡	熊本市新南部町	散布地	布目瓦片	熊本博物館	東部P 26	
12 大江遺跡	熊本市大江3丁目	散布地	布目瓦片	東光彦	東部P 158	
13 大江青葉遺跡	熊本市大江2丁目	散布地	布目瓦片		東部P 158 大江青葉遺跡調査報告	
14 大江東原遺跡	熊本市大江6丁目	散布地	布目瓦片		東部P 159	
15 小関原(上段)遺跡	熊本市大江渡鹿小関原	散布地	布目瓦片		東部P 33	
16 杉ノ木遺跡	熊本市大江渡鹿	散布地	布目瓦		東部P 158	
17 辻遺跡	熊本市大江渡鹿辻	散布地	布目瓦片	東光彦・熊本博物館	東部P 133	
18 渡鹿廃寺A地点 (託麻郡家址)	熊本市大江渡鹿上の原	郡家址	布目瓦・軒丸瓦	熊本博物館・熊本大学	東部P 133・熊本県報 3 熊本市史	
19 渡鹿廃寺B地点 (託麻郡寺)	熊本市大江村の上	寺院址	布目瓦・軒平瓦 軒丸瓦・鬼瓦	熊本博物館・熊本大学	東部P 143・熊本県報 3 熊本市史	

遺 跡 名	所 在 地	種 類	遺 物	保 管	備 考
20 南 平 上 遺 跡	熊本市大江南平上	散布地	布目瓦片		東部P 130
21 小 山 窯 跡 (榎谷寺瓦窯跡)	熊本市小山町榎谷寺	窯 址	布目瓦	熊本博物館・熊本女子大学	東部P 71
22 中 山 窯 跡	熊本市小山町中山	窯 址	布目瓦		東部P 80
23 北久根山遺跡	熊本市北久根山	散布地	布目瓦	熊本博物館	東部P 131・肥後上代文化史
24 大道寺廃寺	熊本市京町柳川	寺院址	軒丸瓦・布目瓦・軒平瓦		北部P 46
25 小 峰 遺 跡	熊本市黒髪町下立田	散布地	布目瓦	熊本大学	熊本史学 9 号
26 上 江 津 遺 跡	熊本市神水町地先上江津湖	散布地	布目瓦片		東部P 212
27 二 王 堂	熊本市神水町八丁馬場入口	散布地	布目瓦		東部P 215
28 上 ノ 原 遺 跡	熊本市健軍町	散布地			
29	熊本市健軍町健軍神社境内	散布地	布目瓦・軒平瓦		文化財情報No.55
30 鳥 井 原 遺 跡	熊本市健軍町	散布地	布目瓦片		
31	熊本市健軍町ミョウゲンジ屋敷下	散布地	布目瓦	熊本博物館	昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書
32 く ら こ う じ 遺 跡	熊本市白藤町	散布地	布目瓦	熊本博物館	
33 陣 山 廃 寺 (肥後国分尼寺)	熊本市水前寺公園	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	熊本大学・熊本博物館	南部P 94
34 宮 園 遺 跡	熊本市出水1丁目	散布地	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	熊本県教育委員会	
35	熊本市高橋町	散布地			
36	熊本市高橋町堂園	散布地	軒丸瓦片	熊本博物館	
37 千 葉 城 町 遺 跡	熊本市千葉城町	散布地	布目瓦	高木敏幸	

遺跡名	所在地	地種	種類	遺址	物	保	管	備	考
38 神園山窯址群	熊本市長嶺町神園		窯址	布目瓦				東部P 73・熊本県報 3	
39 迎八反田遺跡	熊本市長嶺町迎八反田		散布地	布目瓦				東部P 121	
40 西水前寺町遺跡	熊本市西水前寺町		散布地	布目瓦		東光彦・熊本博物館		東部P 161	
41 鮑田国府	熊本市二本木延命寺		国府址	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦 丸瓦				南部P 62・熊本市史	
42 石塘遺跡	熊本市二本木町		散布地	布目瓦		熊本博物館		熊本史学12号	
43 監物台遺跡	熊本市二の丸町		散布地	布目瓦		乙益重隆・熊本博物館			
44 帯山遺跡	熊本市保田窪本町		散布地	布目瓦		熊本博物館		東部P 127	
45 保田窪遺跡	熊本市保田窪本町		散布地	布目瓦		熊本博物館		東部P 128	
46 岩崎遺跡	玉名市岩崎池田674		散布地	布目瓦					
47 蓮華院浄光寺跡	玉名市築地		寺院址	布目瓦		川原弘海			
48 田島遺跡	玉名市中田島		散布地	布目瓦		玉名高校			
49 稲荷山薬師堂遺跡	玉名市繁根木宮中		散布地	布目瓦・軒平瓦・軒丸瓦 鬼瓦・鬼面瓦		玉名高校		日本考古学協会第26回総会研究発表要旨	
50 玉名郡家址	玉名市立願寺字山		郡家址	布目瓦					
51 立願寺廃寺	玉名市立願寺塔の尾		寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼瓦		玉名高校		日本考古学協会集報 別篇4 第15回総会研究発表要旨	
52	菊池市イシヤンドン坂		散布地	布目瓦				熊本県の歴史	
53 西寺遺跡 (菊池郡家)	菊池市西寺		郡家址	布目瓦・軒丸瓦		熊本大学		熊本県文化財調査報告 5	
54 南園遺跡	菊池市西寺南園		散布地	布目瓦		田中儀信		菊池文化財調査票	
55 正観寺地藏堂遺跡	菊池市隈府正観寺		散布地	布目瓦		川上勇輝		熊本県文化財調査報告 5	

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	備考
56 推定山鹿郡家	山鹿市桜町	散布地	布目瓦・軒平瓦		熊本県の歴史・熊本史学18号
57 中村廃寺跡	山鹿市中村	寺院址	軒平瓦・軒丸瓦・鬼瓦	山鹿博物館・鹿本高校	熊本史学18号
58 東鍋田遺跡	山鹿市鍋田西原	散布地	布目瓦片		熊本県文化財調査報告31
59	宇土市古保里	散布地	布目瓦		
60 能寺廃寺	八代市古麗町能寺	寺院址	軒丸瓦		夜豆志呂31号
61 興善寺廃寺	八代市興善寺町興善寺明言院	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼面軒丸瓦	日隈正道・熊本県文化課 熊本博物館	龍峰村誌 熊本県文化財調査報告 1
62 石原五反田廃寺	八代市宮地町字石原五反田	寺院址	布目瓦・軒丸瓦	八代市社会教育課 宮地小学校・江上敏勝	
63 勤行寺跡	八代市宮地町宮地小畑	寺院址	布目瓦・軒平瓦	江上敏勝	八代市郷土史研究史料 夜豆志呂31号
64 中宮護神寺跡	八代市妙見町宮地谷	寺院址	布目瓦・軒丸瓦	盛高靖博・江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
65 妙見上宮跡	八代市妙見町宮地横嶽上宮	神社址	布目瓦・軒丸瓦	内田辰雄・江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
66 妙見中宮跡	八代市妙見町宮地中宮南平	神社址	布目瓦	江上敏勝	八代市の文化財・夜豆志呂31号
67 柚の木遺跡	飽託郡北部町柚の木	散布地	布目瓦	熊本大学	
68 稻佐廃寺跡	玉名郡玉東町稻佐切畑399	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	玉名高校・熊本大学	熊本県の歴史
69 西安寺址	玉名郡玉東町西安寺	寺院址	布目瓦		熊本県文化財調査報告 8
70 正院遺跡 (山本郡家)	鹿本郡植木町(山本)正院	郡家址	軒丸瓦・布目瓦		熊本県の歴史
71	鹿本郡植木町富応	散布地	布目瓦		第二高校考古学部「部報」VOL. 7
72	鹿本郡菊鹿町黒蛭	散布地	布目瓦		
73 鞠智城跡	鹿本郡菊鹿町米原	城址	布目瓦・軒丸瓦	熊本県教育委員会	熊本県の歴史 文化財情報No.54

遺	跡	名	所	在	地	種	類	遺	物	保	管	備	考
74	岡	遺	跡	菊池郡泗水町田島岡		散布地	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	軒平瓦	坂本記念館			菊池文化財調査票	
75	田	島	廃	寺	菊池郡泗水町田島字坂口	寺院址	軒丸瓦・軒平瓦	軒平瓦	坂本記念館			田島廃寺発掘調査報告	
76					菊池郡泗水町住吉	散布地	布目瓦						
77	欠	番											
78	四面	神社	遺跡	菊池郡七城町打越		散布地	軒平瓦・布目平瓦	軒平瓦					
79	十	連	寺	跡	菊池郡七城町水次	寺院址	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦 丸瓦	平瓦	熊本大学・山鹿博物館			熊本県文化財調査報告 5	
80	御	手	洗	神社	上益城郡甲佐町安平	散布地	布目瓦		緒方勉				
81					上益城郡益城町塔の平	散布地	布目瓦						
82					下益城郡小川町正院	散布地	布目瓦						
83	年	の	神	遺跡	下益城郡小川町北小野	散布地	丸瓦・平瓦						
84	沈	目	遺	跡	下益城郡城南町沈目	散布地	布目瓦片					沈目	
85	沈	目	立	山	遺跡	散布地	布目瓦片					沈目立山	
86	陳	内	窯	跡	下益城郡城南町陳内本村	窯址	平瓦・軒平瓦		城南町公民館・熊本大学			城南町史	
87	陳	内	廃	寺	下益城郡城南町陳内遺の上北前田	寺院址	布目瓦		城南町公民館・熊本大学			城南町史	
88	益城	国府	推	定	地	下益城郡城南町陳内舞の原	国府址	布目瓦	城南町公民館・緒方勉				
89	山	上	蔵	司	下益城郡城南町陳内	倉址	布目瓦					城南町史	
90	上	ノ	原	遺跡	下益城郡城南町塚原字上ノ原	散布地	布目瓦						
91	東	亀	島	瓦	窯址	下益城郡城南町鰐瀬東亀島	窯址	布目瓦				城南町史	

遺跡名	所在地	種類	遺物	保管	管	備	考
92 益城郡家跡 (大明神遺跡)	下益城郡城南町鰐瀬宮の前	郡家址	布目瓦	松本雅明・城南町公民館	城南町史		
93 陣の平窯跡	下益城郡中央町大沢水西山	窯址	布目瓦	本田 営三・熊本大学			
94 西山窯跡	下益城郡中央町大沢水西山	窯址	布目瓦	本田 営三			
95 平原窯跡	下益城郡富合町平原本庄	窯址	瓦	城南町公民館・熊本大学	城南町史		
96 浄水寺	下益城郡豊野村下郷寺村	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦 鬼瓦	豊野村公民館・熊本大学	城南町史 熊本県文化財報告 3		
97 八の瀬戸窯跡	下益城郡豊野村下巢林八の瀬戸	窯址	鬼瓦・軒平瓦	豊野村公民館・熊本大学	城南町史		
98 峯尾原窯跡	下益城郡豊野村上巢林峯尾原	窯址	布目瓦	本田 営三・城南町公民館	城南町史		
99 古保山廃寺	下益城郡松橋町古保山池尾	寺院址	布目瓦・軒丸瓦・軒平瓦	松橋公民館・城南町公民館 熊本大学	熊本史学13号・城南町史		
100 弁天廃寺	下益城郡松橋町	軒丸瓦					
101 平原窯跡	八代郡宮原町	窯址	軒平瓦・軒丸瓦・平瓦 丸瓦	熊本県文化課			
102 法道寺跡	八代郡龍北町野津法道寺	寺院址	布目瓦		八代郡誌		
103 禿島遺跡	天草郡大矢野町維和大桜	散布地	布目瓦		熊本史学50号		
104 成合津遺跡	天草郡大矢野町登立字御庄屋田	散布地	布目瓦		熊本史学50号		
105 高山窯跡	球磨郡深田村大字深田字梳木	窯址	軒平瓦・平瓦	深田村（熊本博物館寄託）	熊本県の歴史 供給先は勝福寺か		
106 十連寺窯跡	荒尾市平山小路	窯址	布目瓦	荒尾市教育委員会			
107 番文窯跡	荒尾市樺下横打	窯址	軒平・丸・平瓦	熊本博物館	熊本の歴史 2（熊日新聞社）		
108 田畑窯跡	飽託郡北部町下硯川田畑・小園	窯址	丸瓦・平瓦				
109 大塚遺跡	玉名市立願寺大塚（大塚古墳頂部）	散布地	布目瓦1点	熊本県教育委員会			

110	玉名市永徳寺 (菊池川河川敷)	散布地	軒丸・軒平・丸・平瓦	徳本 明		
111	世尊寺跡 玉名郡玉東町木葉白木字折口	寺院址	布目瓦	玉東町教育委員会		
112	凡導寺跡 山鹿市蒲生福原	寺院址	平瓦	山鹿博物館		
113	(伝)菊池市隈府菊池神社境内	軒丸瓦		菊池神社		熊本県史跡名勝天然記念物 調査報告P 342 十蓮寺出土のものか
114	長嶺遺跡 熊本市市長嶺町541-1	散布地	布目瓦	熊本市教育委員会		
115	鹿本郡植木町山本山口	散布地	布目瓦			
116	皮籠石遺跡 飽託郡北部町和泉川東	散布地	布目瓦			
117	中山五輪塔遺跡No.5墓壇 熊本市小山町中山	中世墳墓	布目瓦 2点	熊本県教育委員会		熊本県文化財調査報告36集
118	二本木グランド遺跡 熊本市二本木3丁目	散布地	布目瓦			
119	久保遺跡 上益城郡御船町豊秋久保	散布地	丸瓦 8点	熊本県教育委員会		熊本県文化財調査報告18集
120	西天神原遺跡 下益城郡城南町平野西天神原	推定益城 軍団跡	布目瓦 1点	熊本県教育委員会		熊本県文化財調査報告32集
121	中小野遺跡 下益城郡小川町中小野	寺院址?	軒丸瓦 1点	熊本県教育委員会		熊本県文化財調査報告39集
122	上山神遺跡 上益城郡御船町御船上山神	散布地	布目瓦			
123	吹上遺跡 上益城郡御船町豊秋	散布地	布目瓦	熊本県教育委員会		
124	古閑遺跡 上益城郡益城町古閑	散布地	布目瓦			
125	天福寺跡 熊本市清水町打越	寺院址?	布目瓦		北部P 22	
126	川田京坪遺跡 八代市川田町西字京坪	散布地	軒平瓦	熊本県教育委員会		熊本県文化財調査報告46集

備考欄の東部・南部・西山・北部とは熊本市文化財調査報告書の各巻を示す。

この地名表は村田・甲元両氏作成のものを基にし、広瀬正昭氏作成のものを追加した。なお追加分等については富田綾一・東光彦・緒方勉・上野辰男・松本健郎・高木正文・江本直・田添夏喜・桑原憲彰・徳本明・豊崎晃一・平山修一・丸山武水・福田正文・吉田雅人・橋本誠二・坂田幸之助・西住欣一郎、他の多くの諸氏の御教示を得た。地名表No.41の鮎田国府には延命寺跡の瓦類を含ませている。